

日頃お世話になっているみなさまへ

春陽の候、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

今年は11種類の発行物をお届けいたします。

2017年度は「ことば」でプロジェクトを捉え直した1年でした。

東京アートポイント計画の始動は2009年。10年という節目を迎えるにあたって何をしていくのか。もう一度立脚点を見直したい。そう考えたとき、個々人がきちんと経験をことばにし、それを伝えていくことが重要だと考えました。

具体的には、各プロジェクトに伴走する7名のプログラムオフィサーたちが、自らの名前で発信すること。さまざまな媒体で、それぞれのビジョンや心根を意識的に言語化してきました。そのことばは、エッセイやマニフェストではなく、思考の軌跡のようなものです。まだまだ試行錯誤の段階ですが、ここから対話をはじめたいと思っています。

近頃、国や社会、地域といったさまざまな場面で「分断」が加速する時代において、コミュニティの重要性を実感しています。単発のイベントや展覧会をして終わりではなく、時間をかけてできるだけ対話を繰り返す。それが東京アートポイント計画で続けてきた、文化によるコミュニティづくり、ひいては文化的な生態系を育むことへとつなぐ試みではないでしょうか。もちろんその実現には途方もなく手間暇がかかります。だからこそ、腰を据え、時間をかけて取り組んでいきたいと思えます。

次年度も変わらぬお付き合いのほど、よろしくお願ひ申し上げます。



アーツカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長

あ 67

生態系を、ことばで紡ぐ

東京アートポイント計画

10年目に向けたことばのアウトプットへ

今年度は11事業を共催しました。そのうち公募で選出された2事業が新たに始動し、「汐入タワープログラム」「リライトプロジェクト」「東京スーヴとブランケット紀行」の3事業が最終年を迎えました。新しく参加したNPOは、町田市でユニークな保育事業を展開する社会福祉法人東香会と、神津島でシビックプライド醸成を目指すNPO法人神津島盛り上げ

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

言葉と体験を「紡ぐ」学びへ

「思考と技術と対話の学校」では、学びのプログラムを一新。「紡ぐ」をキーワードに、アートプロジェクトの現場に欠かせない人材を育成する2つの連続講座をスタートしました。「言葉を紡ぐ」コースではプロによる指導も受けながら、言語化する技術を磨き、「体験を紡ぐ」コースでは、プロジェクトや作品について語るガイドツアーやトーク

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

声を集め、東京からも伝える活動へ

震災から7年目を迎え、東北3県で継続的に9事業を実施。現地のパートナーとの緊密な連携により、地域状況に応じたプログラムを展開しました。岩手県釜石市では震災後に新設された、かまいしこども園、NPO法人@リアスNPOサポートセンター、一般社団法人谷中のおかってが連

東京の地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを実施し、NPOの活動と組織の両面の成長を支援する取り組み。

隊。いずれもアートプロジェクトを通じた地域の未来づくりを目指します。今回お届けした発行物の中には、「リライトプロジェクト」と「東京スーヴとブランケット紀行」のドキュメントブックも収めています。これらは4年間をまとめた力作です。

2017年度の東京アートポイント計画は、「ことば」を発し、新たな人や知恵と繋がることを目指した1年でした。イベントシリーズ「Artpoint Meeting」では、「まちで企画」「日常に還す」と題した2本

アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共に作りあげる学びのプログラム。

企画などに挑戦。いずれのコースも約半年間じっくり「ことば」と向き合い、アートプロジェクトの体験を豊かにするための新たな「紡ぎ方」を探りました。一方、「研究・開発」では、これまで取り組んできたアートプロジェクトの記録・調査、評価・検証に関わるプログラムを深化させ、事業の調査やアーカイブ手法の確立、「年史」の企画編集などをスタート。関係者の話を聞く場をつくり、インタビューやアンケートを実施し、過去資料から事

東京都による芸術文化を活用した東日本大震災の被災地支援事業。

携し、都内事業で培ったスキルを活用した「ぐるぐるミックス in 釜石」を発展させる試みが進行しています。宮城県松島湾周辺を足場に、地域の文化資源を発掘し、共有する活動を展開する「つながる湾プロジェクト」からは、昨年度の『ハゼ図鑑』に続く、『牡蠣図鑑』をお届けします。福島県いわき市では復興公営住宅の下神白団地で住民の声を集め、伝える「ラジオ下神白一あのとときあのまの音楽からいまここへ」が丁寧な活動を紡ぎ続けています。

のトーク企画と、公開報告会を開催。共催NPOを訪ねる「プロジェクトインタビュー」シリーズもウェブサイトでスタートしました。来年度はいよいよ事業10年目を迎えます。これまでの成果を踏まえ、次の世代を見据えた活動を目指します。

「東京アートポイント計画通信」ブログを更新しています。

<https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/blog/category/artpoint>

業のことばを探りました。これらを基盤に、来年度はより具体的なアウトプットを予定しています。なお、Tokyo Art Research Labの発行物をはじめ、全国のアートプロジェクト関連資料をレクチャールーム+アーカイブセンター「ROOM302」（3331 Arts Chiyoda内）で公開しています。

「ROOM302」は毎週木・金曜、また毎月第2日曜(13:00-18:00)に開室しています。 <https://tarl.jp/room302>

Words Binder 2017 / Box+Letter

発行日 | 2018年3月23日 編集 | 川村庸子 / 佐藤恵美 アートディレクション&デザイン | 川村格夫 発行 | アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階 Tel: 03-6256-8435 Fax: 03-6256-8829 E-mail: info-ap@artscouncil-tokyo.jp URL: <https://www.artscouncil-tokyo.jp>
© 2018 Arts Council Tokyo *本誌はTokyo Art Research Lab研究・開発プログラムにて制作しました。

<p>ブックリスト</p>
<p>今回お届けした冊子の一覧です。</p>

<p>東京アートポイント計画</p>
<p>「TERATOTERA DOCUMENT 2017」JR中央線高円寺駅～吉祥寺～国分寺駅区間をメインに展開するアートプロジェクト「TERATOTERA」の2017年度ドキュメントブック。</p>
<p>「Ways to End Public Art by Relight Project」パブリックアート作品《Counter Void》の再点灯を目指して始まった「リライトプロジェクト」の集大成としての1冊。</p>
<p>「東京スープとブランケット紀行 2014-2017」演出家・劇作家の羊屋白玉を中心に活動するアートプロジェクト「東京スープとブランケット紀行」の4年の活動をまとめた1冊。</p>
<p>「東京ステイ 日常の巡礼～まちと出会い直す10のステップ」アートプロジェクト「東京ステイ」が辿り着いた土地との向き合い方、「ビルグリム(巡礼)」を実践するためのツール。</p>

<p>Tokyo Art Research Lab</p>
<p>「Tokyo Art Research Lab 思考と技術と対話の学校 2017 アニュアルレポート」アートプロジェクトを紡ぐ力を身体化するスクールプログラム。2つの連続講座を中心に実施した、2017年度のアニュアルレポート。</p>
<p>「旅するリサーチ・ラボラトリー」アーティストのmamoruと下道基行を中心に、フィールドワークと表現の可能性を追求する研究・開発プログラムから、ウェブサイトのご案内。</p>

<p>Art Support Tohoku-Tokyo (東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)</p>
<p>「松島湾の牡蠣図鑑」行政区を越えて湾を囲む地域の文化資源の発掘と共有を行う「つながる湾プロジェクト」から生まれた松島湾の牡蠣図鑑。</p>
<p>「福島子ども藝術計画2017」子どもを対象としたアーティストのワークショップを県内各所で展開してきた「福島子ども藝術計画」の2017年度の活動報告書。</p>
<p>「ランドスケープ ポートレイト まちの写真屋の写真論」岩手県釜石市内の写真館の人と活動に焦点をあわせた「ランドスケープ ポートレイト-まちの写真屋の写真論」で制作した地域の「記録者」の記録。</p>
<p>「FIELD RECORDING vol.01 特集:記録の生態系にふれる」Art Support Tohoku-Tokyo事業で創刊したメディア。東日本大震災以降、東北で生まれた新たな「記録」の試みをインタビューや座談会で紹介。</p>
<p>「復興カメラ 2018 3.11」震災直後から岩手県釜石市と大槌町の変化をカメラのレンズを通して見つめてきた「復興カメラ」の活動紹介。</p>

Words Guide 2017▶▶▶2018

今回お届けした冊子や2017年度に執筆したブログの連載記事などの中から、**新たに生まれた「ことば」をご紹介します。**

その戯曲には、3分ほどで終わる短いプロローグがあって。そこが、この4年間の活動に当たる部分。だから、3分ものを4年間に引き延ばしたんだ

など(笑)。
『あとは命名を待ったけ。都市を減速させる試み—羊屋白玉「東京スープとブランケット紀行」インタビュー〈後編〉』

東京アートポイント計画に参加する多くのアートプロジェクトは、いったいどのような問題意識のもと、活動しているのだろうか？ 2018年2月より、アーツカウンシル東京ウェブサイト内のブログ「東京アートポイント計画」にて、プロジェクトインタビューシリーズを開始。表現者やNPOへの取材を通して、当事者の想いやこれからのアートプロジェクトのためのヒントに迫ります。第1回で取り上げたのは、演出家・劇作家の羊屋白玉さんを中心に2014年より始動した「東京スープとブランケット紀行」。毎月、彼女が22年間一緒に暮らした猫の月命日に、江古田の街で買い集めた食材でスープをつくり、それを参加者みんなで食べることを軸にしたこのプロジェクトでは、そのささやかな行為の積み重ねを通して、成熟都市の抱える「看取り」の問題に取り組んできました。2017年度、参加型プログラム「R.I.P. TOKYO」の開催を機に、ひとつの節目を迎えたアートプロジェクトの姿に迫りました。

ふたつの講座で繰り返し考えたのは、どんな立場で、何を、どこに向けて伝えようとするのか。そしてなぜそれをするのか、である。

「Tokyo Art Research Lab 思考と技術と対話の学校 2017 アニュアルレポート」紡ぐことへの挑戦

Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」の連続講座では「言葉」と「体験」という2つのアプローチからアートプロジェクトを「紡ぐ」ことに向き合ってきました。ほかにも運営の「技術」を深め、「今」を知るための公開講座も開催しました。アートプロジェクトを「動かす人」から「紡ぐ人」へ。その転換期を迎えた学校の1年間の軌跡が収録されています。本書の「ことば」からは、講座の狙いや各回の概要だけでなく、ゲストや受講生に伴走するスクールマネージャーなど学校を構成する人々の姿も垣間見えてきます。ある受講生は「未知のものを魅力的に伝えよう考えることは、未来を創造する力になる」と実感を語っています。こうして紡がれた言葉が、次の「紡ぐ人」への架け橋になっていくのかもしれませんが。

自分たちは、何にこだわり、プロセス重視で進めてきたのか？ 東日本大震災後の日本に生きる私たちが、アートを紹介すべきことはなにか？

同じ土地で暮らすからこそ地続きに見えてくる「私」の表現を「公」の場に掬い上げる。そのまなざしは個々のものとしての「作品」に焦点をあてるのではなく、複層的な個々人の文化的な営みに向けられている。

「FIELD RECORDING vol.01 特集:記録の生態系にふれる」編集後記

いま、東北の地では何が起きているのだろうか？ 東日本大震災から7年目。震災以降に生まれているように感じる文化的な営みを「記録の生態系」と名づけ、担い手たちを訪ね歩き、その「声」を記録しました。創刊号では、せんだいメディアテークのアーティスティックディレクター・甲斐賢治さんのインタビューや、「復興カメラ」の座談会、美術家・中崎透さんの「福島大風呂敷、制作日記2011」などを掲載。2016年に発行したインタビュー集『6年目の風景をさく』で出会い直した声を手がかりに、10年目という節目に目を向けながら、いまま変化し続ける風景を観測し続けていきたいと思っています。東北に軸足を置きながら、ほかの場所と時間をつなぐメディアとして、毎年発行予定。

2011年3月11日から、1年のはじまりは「3月11日」になりました。

間に立つことで気づくこと、見えてくることがあります。それをさぼらずにことばにする。アートプロジェクトがアートの力を借りて新しい価値や風景を見ようとするのならば、ことばにすることは欠くことのできない態度のひとつです。

政治とはその社会に生きるすべての人が参画すべきものであって、他でもないわたしたち自身の問題なのである。個人としてしか触れることのできない、まつりごと＝政治の手触りをこの3日間を通して訪れた人たちと共有したい。

「TERATOTERA DOCUMENT 2017」TERATOTERA祭り 2017のテーマ「Neo-Political～わたしたちのまつりごと～」について

「Ways to End Public Art by Relight Project」なぜ「Ways to End Public Art」か

現代美術家・宮島達男さんが「生と死」をテーマに制作した六本木けやき坂のパブリックアート作品「Counter Void」をシンボルとして、未来の生き方や人間のあり方を考えるプラットフォームを目指してきた「リライトプロジェクト」。最終年を迎え、その軌跡を構想段階からふりかえり、プロジェクトメンバーや活動を通じて出会った人々の思考の変化、それぞれが起こしたアクションをドキュメントブック『Ways to End Public Art』としてまとめました。タイトルに込めた意味は、「パブリックアートが終わる道、終わらせる方法」または「パブリックアートという概念、観念、思考、歴史を終えるという道、方向、方法、道のり、選択」。個々人の体験や記憶にしかない多くの「無形の資産」を複数の視点から残すことを試み、未来につなげるための1冊。

それにしても浦戸のカキ漁は、後継者不足で困ったね。これからどうなるんだろうね。

「松島湾の牡蠣図鑑」むき子さんの話

「復興カメラ 2018.3.11」

<p>「ネットTAM ネットTAM講座 実践編「アートプロジェクト」第8回 プログラムオフィサー 先を見据えて間に立つ」</p>
<p>今年度、東京アートポイント計画では、アートマネジメント総合情報サイト「ネット TAM」(※)で、アートプロジェクトにまつわるオンライン講座を担当。『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本(増補版)』をテキストに、リレー方式で8つのことばを取り上げ、執筆しました。さまざまな文化事業を経験し、NPOの活動に寄り添い、それぞれに異なる専門性を持つプログラムオフィサー。通常はプロジェクトの舞台裏で中間支援に勤しむメンバーが、自らの経験と思考を言語化することに汗した1年でした。最終回を飾ったことばは、「プログラムオフィサー」です。改めてアートプロジェクトの可能性、そして間に立つ専門職の意義を問いました。 ※「ネットTAM」はトヨタ自動車の社会貢献活動の一環として、企業メセナ協議会と連携して運営されているウェブサイトです。</p>